



吉川英梨

2018年の秋、海上保安協会の宮野直昭常務とやり取りを始め、数週間。友の会の理事を引き受ける前提で、まずはお会いすることになりました。海上保安庁の写真を撮らせたなら日本一の、毎日新聞・米田堅持記者の写真展が銀座であるとのこと、早速、伺うことになりました。

作家というヤクザな商売柄、官公庁の方と会う機会はありません。取材で何度も警察官からお話を伺ってきましたが、みなさん非常に敷居が高い(笑)。きっと海上保安庁の人々も、作家なんか胡散臭く見て塩対応なんだろうなあなんて覚悟しておりましたが……。

## 八丈島沖救助の話聞き「作家魂に火がついた」

宮野常務のなんとざっくばらんなこと！まるでマブダチみたいに接してくれます。米田記者も私を歓迎してくださり、ギャラリーを案内してくれました。

迫力ある巡視船の写真。波しぶきを上げるゴムポート。ホバリングのヘリからロープ一本で降下する隊員……。

作家の性です、ましてやこの数年『新東京水上警察シリーズ』で海を書いてきた者の性です。写真を見るだけで、湧き上がるものがありました。

ああ、早く、また海の話を書きたいな……。

気が付けば、宮野常務と米田記者は、いつかの海難救助の話をも熱く語ってらっしゃいます。

八丈島沖第一幸福丸転覆事故の話でした。この件は幾度となくマスコミに取り上げられる、奇跡の救助劇だったと聞きま

米田記者の写真展に出品された作品の1つ。二管本部が行った展示訓練で、高速で疾走する複合艇＝宮城県塩釜市沖で2018年10月6日



す。巡視船「いず」の潜水士が大活躍されたそうですが、当時、三管本部の警備救難部長として指揮を執っていたという宮

野常務は「こっちはもうひっくり返っちゃったよ。現場から報告がくると同時に要救助者浮上の映像がテレビで流れている

だもん」と苦笑い。

一方、報道する側の米田記者のお話興味深いものでした。現場は本土からはるか南の八丈島沖、どうしても『絵』が欲しい、しかしヘリの燃料の残量が……そんな中、NHKのヘリが要救助者の映像をいち早く捉え、先を越されてしまい、「やられた……！」

救助する側、報じる側の、手に汗握る攻防に、私の作家魂はもう、火がついていました。

絶対、海保の話を書く。

その後、実際に『海蝶』の執筆に入る約2年の間に、数ある海難救助の話を知りましたが、構成を立てる段階でまず頭に浮かんだのが、この八丈島の海難事故でした。

こうして『海蝶』の舞台は八丈島沖に、主人公は第三管区海上保安本部所属ということになったのです。(つづく)

### 手に汗握る攻防 主人公は三管所属に決まり